

審査の結果の要旨

氏名 山口香苗

1945年に日本による半世紀に渡る統治から解放された台湾は、国民政府により接収・統治されたが、民衆との矛盾が激化し、1949年から87年まで戒厳令が敷かれることとなった。この間、とくに中華人民共和国の成立によって東西冷戦の前線に置かれた台湾では、独裁体制下での市場経済開発が進められてきた。戒厳令解除後、民主化と社会統合が急務となり、市民社会の形成が模索されることとなった。

市民社会形成の動きには、教育改革運動が深く関わっている。この過程で「知識の解放」をスローガンに生まれたのが「社区大学」であり、カリキュラムも、大学レベルの知識を学ぶ「学術課程」、日常生活を豊かにする教養を学ぶ「生活芸能課程」、グループやサークルをつくり、社会实践につなげる「社团課程」の3つから構成されている。今日では、社区大学は生涯学習施策の一環として制度化され、多くの市民が学んでいる。その市民社会形成の論理の特徴を、2年半に渡る筆者本人の受講と受講者へのインタビューを通して実践的に明らかにしたのが、本論文である。

本論文は、制度化が進んでいる台北市の社区大学を例として、上記の内容を序章、第1章「社区大学の設置過程と理念」、第2章「台北市社区大学の制度と運営の特徴」で述べた上で、第3章・第4章・第5章で、「学術課程」「生活芸能課程」「社团課程」それぞれを特徴とする社区大学を選定し、社区大学の実践が持つ市民社会形成の論理を検討している。第6章では、原住民族部落大学についても取材し、その特色を明らかにし、終章で本研究の成果を概括している。

本研究によって明らかにされたのは、以下の諸点である。1. 社区大学の理念は高度な知識の伝授による市民の民主的な自覚の向上とそれを通じた市民社会の実現だが、現実には、市民のニーズが高いのは生活上の教養や趣味であり、実践が市民社会の形成という明示的な目的に直結しているわけではない。2. 台湾内外の先行研究は、理念とは異なる実践に対して批判的であり、理念に立ち返ることを提言するが、社区大学の実践と市民社会形成の論理の間には迂回路とでもいうべきものが存在している。3. それは、市民が自由に学べることをありがたく思い、自由な学びを可能にする豊かな民主社会の重要性を認識することを基盤としている。4. 市民にとっては学術課程も社团課程も生活芸能課程と同様の位置づけであり、カリキュラムの三類型は生活上の教養へと収斂している。5. 原住民族部落大学も、多数派である漢族市民が少数民族の文化を学ぶことで、相互理解と社会統合を促している。

社区大学は、市民の利用によって実態が理念を組み換え、かつ理念よりも深い民主社会の統合の現実を、市民生活において生み出しているのだといえる。

以上のように、本研究は、長期にわたる実地調査をもとに、社区大学の実践が生み出す市民社会形成の新たな論理を明らかにしており、日本における研究がほとんどない中、今後の台湾社会の研究に多くの知見をもたらすものと評価し得る。よって、本論文は博士（教育学）の学位を授与するにふさわしい水準にあるものと判断された。